言靈（續）――「や」の諸樣相（後編）

高田　友

（九）

今一つの殘れるは、「《係助詞》の「や」と《切れ字（主題提起）》の「や」を如何にして識別すべしや」の疑問なり。されど、さは難題にはあらず。形を見るに、文末連體形なれば《係助詞》、終止形なれば《切れ字（主題提起）》の「や」》なり。とはいへ、さは「讀む際の指標」にはなれど、文語を書かむと欲するの人には效なかるべし。

文語作文に際して、兩個の「や」を識別せむがためには、意味を考察するの要あり。學校文法の講義にて行き屆かざるの儀に一つのポイントあり。すなはち、《係助詞》の「や」、卽ち《係り結びを作る「や」》は、「か」と同斷にて、疑問文（反語を含む）の場合にあらでは、使はるることなし。平敍文中に紛れやすき「や」あれば、さは《切れ字（主題提起）》の「や」》なり。

分別に苦しむ「や」もあり。「林檎や食ふ」を檢（けみ）するも、「林檎について言うならば、（私は）食べる」の心算にて言ふもあり、この場合は《切れ字（主題提起）》の「や」なり。「食ふ」、四段活用の動詞なれば、終止形と連體形が「くふ」なる同形なれば混同の生ずるなり。

《切れ字（主題提起）》の「や」は、現代語（口語）にては「は」がほぼその働きを擔ひてあれど、さは（十）にて說かむ。

文脈を見て判斷せざるを得ざる場合もありとは言へるなり。

別儀の動詞「植う」を見よ。該（これが）動詞は「据う」「飢う」と同じく、《ワ行下二段活用》にして、終止形は「うう」、連體形は「ううる」なり。

「林檎や植うる」と言へば、「（おまえは）林檎を植えるか」の意。而して、「林檎や（我）植う」と言へば「林檎について言うならば、（俺が）植える」とは言へるなり。

因みに、本項（九）冒頭の「その言やよし」。

現代中國語に「說的也是」なる熟語あり。「言うこと（說的）」が「やはり・なお（也）」「是（正しい／『是非』の『是』）」といふ理窟。「おまえの言うこと、いいなあ」

と謂ひたるが、この言ひ様に該(あた)る古代中國語より「その言やよし」なる表現の出來したれりとぞ推察せらるる。

（十）

①「林檎や植うる」と②「林檎植うや」はいづれも疑問文なり。（右の「林檎や植う」と混同なしたまひそ）

今一度文法的を確認すれば、①にては係助詞の「や」は連體形にて結ぶに據りて、文末は「植うる」となり、②にては終助詞の「や」は終止形に付くなれば、直前は「植うる」にはあらで、「植う」となる。

さて、①と②は全き同義かと問はるれば、些かニュアンスを異にすと言はざるべけむや。

（十一）

閑話休題(それはさておき)、驛のトイレのアナウンスにて感心せらるる表現を聞きたりき。

「左は女子トイレです。右が男子トイレです」

この「は」と「が」の使い分け、豈絶妙ならざらむや。

このセリフの背景には、「男は悉皆痴漢(しつかい)なり」といふ男性に對する眞實を穿ちたる性差別思想の命題包含せらるるあり。さはさなれど、このアナウンスの文を草案したる人、洵に言語感覺鋭き人かなとこそは慨嘆せらるれ。

「は」は、文語なれば間投助詞《切れ字（主題提起）》の「や」に置き換えられるの段多しと言ふを得む。「左や女子トイレなり」なのです。

「や」がありとも、「トイレなる」にはならず。「トイレなる」と言ひたらむには、「左はトイレですか」なる疑問文とは化すべし。

「あなたは今、左のトイレに入ろうとしているが、左について言うならば、それは女子トイレです」とまづは注意を喚起せり。

言い換ふれば、《切れ字（主題提起）》とは《舊情報》を與ふるなり。「あなたが入ろうとしている左側のトイレは」とは言へり。

而して、後半にては「右が男子トイレです」と「が」を使へり。さは《新情報》なり。「あなたは知らなかったでしょうが、右にもトイレがあるんですよ。あなたが今まで知らなかった右が男子トイレなのです」とは言へり。the ならで a を付けるべき設定なり。この文の場合は the と a にては分別するに難澁する所なれど、一般論的にはかくはと理解したまふべし。

「が」と「は」、a と the の違いに直結するもにはあらねども、類似する《特定》《非特定》、《舊情報》《新情報》の觀念の隱れてありと言ふとも過言ならざるべし。

「や」について言へば、《切れ字（主題提起）》の「や」は舊情報を提供する所なれど、（二）（三）にて解說したるが如くに、《係助詞》の「や」にも舊情報を與ふる役割ありとは知りたまふべし。

（十二）

①「林檎や植うる」と②「林檎植うや」の相異なるもこれに似る。（いづれも疑問文なれど）

疑問文を作る「や」は片や①の如くに前方に出でて係助詞となり、連體形にて結ぶ場合あり。片や②の如くに文末に留まりて終助詞となる（直前は終止形）場合あり。

而して、①に於ては、「る」を消して③「林檎や（我）植う」とすると、《切れ字（主題提起）》の『や』》となるとは既に申せり。

是に於て、①の「や」と③の「や」は相通じるものありとは我が私見なり。

① は「おまえは林檎の枝（種）を持って來て、何かしているようだが、それを植えようとしているのか」、もしくは「ここに林檎の枝（種）があるが、おまえ植えてみるかね」などと申してあり。

他方、②は「「何か植えるのなら林檎にするかね」といふほどの違ひありとぞ申すべき。

その體たるや、③《切れ字（主題提起）》の形から發展して來たるに由りて、《主題提起》の意識殘れるなり。

（十三）

與謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」の詩に、次の一句あり。

「親は刃を握らせて人を殺せと教へしや」

文末の「や」は《疑問の終助詞》なれば、《終止形接續》になるに非ずや。

然るに、「教へしや」の「し」は《過去の助動詞「き」》の連體形なり。

されば、「教へしや」ならで、「教へきや」と爲すべからむ。

學校文法のルールに從へば、「教へきや」の方正しかるべし。

然れども、《過去の助動詞「き」》は、終止形「き」を「し」を以て代用するの例、甚だ多し。すなはち、終止形「き」なるべきなるに「し」を用ゐたるを見むとも、「ああ、こんなものなんだな」と思へば仔細なからむ。さらには拘泥なしたまひそ。

これに似たるが「恙無きや」「恙無しや」の件なり。

形容詞の終止形は「し」にて終はる。然則（しからばすなはち）「恙無しや」の方、正鵠を射たりといふべけれど、「恙無きや」も屢〻用ゐらる。「麗しや」「麗しきや」も倶に頻りに使はるる所なり。

この「敎へしや」と「恙無きや」は關聯ありやなしや。

《過去の助動詞「き」》は《終止形が「き」、連體形が「し」》。然而（しかりしかうして）、形容詞の語尾は《終止形「し」、連體形「き」》。ここより混亂生じて、相反する形の出來したるものとぞ思はるる。

我儕作文をせむには、いづれを正體とやすべき。

實（げ）に《過去の助動詞「き」》を「し」を以て代用する平安朝より甚だ頻繁に使はるる所にして、もはや過てりとは言ふを得ず。すなはち「今日、伯父來（をぢきた）りし」と書くも差し支へなかるべし。

それに對して、形容詞の《終止形「し」、連體形「き」》の崩れて、「恙無きや」の形を取るは稀なり。崩れたりとはいへども、未だ放擲せられたる原則にはあらず。「恙無しや」正にして、「恙無きや」は閏（じゅん）とこそ言ふべけれ。

但（ただ）、日本書紀の定訓に見るに、聖德太子、隋の煬帝に國書を送りて曰く、「恙無きや」と。さは例外なりと思ひ給へ。文部省唱歌「故郷（ふるさと）」にては、「恙無しや友がき」なり。

「この恨み、晴さでおくべきか」は、「や」を使へば、「この恨み、晴さでおくべしや」となる。

「恨み」の後に「や」を入れて、「この恨みや、晴さでおくべしや（べきか）」とするも可なり。是（ここ）に於ては、「恨みや」の「や」は《切れ字（主題提起）》の「や」なれば、『（恨み）や」と（べし）や』と「や」の重複するに非ずや」、と難じ給ふ勿れ。

（十四）

口語にては「そう言うや否や出て行った」と申すあり。

文語にては「さ言ふや否や立ち去りたり」と言ふべし。

これは「否や」を省きて、「さ言ふや立ち去りたり」とするも可なり。「や」のみにて、「〜するや否や」の意を表すを得。

この「否や」は、英語のNo sooner -----than-----.の語法に似たれば、英語を模して作りたる表現ならずやと思ふ各位も多かるべけれど、豈圖らむ、能狂言などに「來るや否や」といふ申しやうあれば、日本語の傳統に外るるものには非ざるなり。

しからば、この「さ言ふや」の「言ふ」は四段活用の動詞「言ふ」の終止形・連體形のいづれならむか。

さは、今例に擧げたる「來るや否や」を見れば明らかなり。「來（く）」なる《カ行變格活用》の動詞は、終止形「く」、連體形「くる」なれば、「～すると（すぐに）」の意の、この「や」は連體形に接續すと言ふを得。「さ言ふや」の「言ふ」も連體形なり。

「種を植えたらすぐに芽が出て來た」と言はむには、「植うや（否や）」にあらずして、「植うるや（否や）」とせずんばあらず。

（十五）

文語作文の間違ひにて屢々見らるるは、現代語「梅や櫻や樣々な花が咲いている」などの「や」の扱ひなり。

この「や」は《並立助詞》と呼ばるるありて、同類の似たるを列擧する場合に使はるれば、《列擧の「や」》と言ふを得む。

《列擧の「や」》は古典の中に見出すを得ざるにはあらねども、口語の響あれば、現代人文語文を書かむには、避くる方好からむか。「梅、櫻の如き樣々の花」、「梅および櫻抔（など）の花」と言ひ換へ給へ。

（十六）

「や」の諸樣相を解說した最後に、係り結びの盲點とも言ふべきものあれば、一家言あらむと欲す。

「《係りの助詞》を擧げよ」と言はるれば、大方（たいはう）は「ぞ・なむ・か・や・こそ」と答ふ。別段過てりとは申さねど、暫し待たれよかし。古典文法初步にて係り結びを習ひたる砌、《係りの助詞》には「は・も・ぞ・なむ・か・や・こそ」あり、と習ひたる記憶の薄（うつす）らと腦裡に殘しておはしまさずや。

この「は」と「も」は何ぞや。

「『は』と『も』があると、《終止形》で結ぶ」と聞いた覺えなしや。されど、通常、文は終止形にて終はるを常とするゆゑ、終止形にて終はる文が《係り結び》の例と教へらるるは首肯するを得ざる所なり。

「係助詞『は、も』がれば、結びは終止形たるべし」とは、「酒は飲む、女は買ふ」の類を言ふにあらずやと茲許（ここもと）愚考致す所なり。

「は」ならで「を」を使へば、「酒を飲み、女を買ふ」となりて、「飲み」は《連用中止法》を作る。然るに、「を」を「は」に替ふれば、「飲み」は「飲む」と化す。さは畢竟、

「連用中止法になるべき所も終止形になる」といふが、「は」を《係助詞》と呼ぶ所以ならむ。

「も」も同じく、「酒も飲む、女も買ふ」と言ふなり。かかればこそ、「は」と「も」は係助詞に分類せらるべきにあらずや。

茲許のかかる私見は、専門家に尋ぬるに、さほどの同意は得られざりき。

讀者各位の御教示を仰ぐ次第なり。

（令和六年一月十五日受附）